

『日本の長い戦後 2』

2017年10月11日

橋本明子氏は、『日本の長い戦後』で、アジア太平洋戦争で受けたトラウマは個人的な精神的負い目だけでなく、文化的、社会的なトラウマが含まれていると言う。その負の遺産を克服すべく、「英雄」「被害者」「加害者」の三通りの語りがある。戦後の新聞や雑誌に掲載された市井の人々の声を聞き、それぞれの語りから、その実像を浮かびあがらせ、多様に検証している。

日本が起こした戦争について、様々な呼び名がある。日本は「大東亜戦争」と言い、米国は「太平洋戦争」と言った。その後の歴史的な検証によって、「15年戦争」「アジア太平洋戦争」などと言われ始めた。日本は米国と戦って、敗北したという認識が強いのではない。しかし、朝鮮、台湾、中国の植民地支配を目指したところから始まっている。戦争は他国に対し「宣戦布告」をもって始まるが、朝鮮、台湾には軍隊を出兵して統治し、中国では「事変」という言葉で植民地化していった。宣戦布告をしていないから、戦争ではないと言った訳であるが、武器を取ったれっきとした戦争であり、やがて東南アジアへと拡大していった。アジア植民地支配に対し、米国をはじめとする連合国に日本の無謀を咎められ、敗戦を迎えたのが事実で、私は「アジア太平洋戦争」が正しいと思っている。

橋本氏は、この戦争について下記のように述べている。「部隊退却のため負傷兵を殺害するときの気持ち、現地農民から食料を奪うときの心理、戦略もなければ戦術もない、人命を無駄にするだけの前進命令に従わされるやり切れない気持ち。人命よりも軍事作戦が重んじられる現実。生き残ったことに対する罪の意識。捨て石として見殺しにされた人への思い。無駄な苦しみを味わされたことへの怒り。精神を病むようになった人のこと。あまりの激痛に耐えられず自害した人のこと。敵を殺すということ。生き残るために人肉を食べること。」戦争で受けたこれらのトラウマを語ることによって、乗り越えようとした証言、子や孫が親から受け継いだ痛ましい声がある。語ることができずに沈黙を通した人、乗り越えられず、精神を病み、暴力的になり、自死した人もいる。

「私の父は貧しい家から陸士を出て大尉として威張れたのがよほど嬉しかったのでしょ。子供のころから戦争の自慢話を聞かない日はありません。中国人の首を切った、フランス人の捕虜を犬に食わせてやった。…等々。楽しそうに話す父。戦争の反省などみじんもなく、こんな男が田舎の町では旧将校として尊敬を集めているのです。」「戦友は次から次へと靖国神社の門をくぐり、重症兵の続出。巻いた包帯にウジがわき、ムクリムクリとうごめき、悪臭を放つ。食料の補給は絶え、草木のしん、昆虫、は虫類も食い尽くし、栄養失調続出。…飢えは人の心もむしばみ…重症兵には絶望の余り自決する者も出た。その銃声が谷にこだまする。切り込みにいきそのまま逃亡、兵站部を襲撃して日本兵同士の食料の争奪戦。」「日本軍が中国に侵略していった目的は、何だと思えますか？…資源の略奪に行ったんです。そのために、中国に強盗に入ったんですよ。僕の仲間が誰もしゃべらないから…殺された中国人たちの供養のつもりで話します。私は7回にわたって…14人の中国人を…生体解剖してしまったのです。」戦争を反省しない英雄談は論外だが、被害と加害の認識は反戦・平和への思いを高める。橋本氏は、被害と加害を重層的に捉え、両者を結ぶ回路を作り、橋渡しをすることによって、新しい思考回線を編み上げることが可能になるのではないかと説いている。そして、「日本が国家として存在しつづけるかぎり、戦争責任が消え去ることはないからである」と念を押している。